

## 『人生象數』について

丸尾 勝

### 一 はじめに

周樹人、後の魯迅は1909年に帰国し、浙江兩級師範学堂で優級科の生理学を担当し、『人生象數』という講義テキストを作成した。「人生象數」の「人」は人体、「生」は生活即ち生命活動、「象」は現象、「數」は「学」の本字で学問の意味で、人体の生命活動の現象の学問、即ち生理学を指す。テキストの冒頭に「生理学」、「生理講義」とある。構成の面で始めに「緒論」、「総論」があり、「運動系第一」、「皮系第二」、「消化系第三」、「循環系及淋巴管第四」、「呼吸系第五」、「泌尿系第六」、「五官系第七」、「神経系第八」、「Generatio 生殖系第九」と続き、「結論」になり、附録として「生理実験術要略」がつく。運動系から生殖系まで各系統でまず系統の構造を示し、その生理を説明して、衛生の対策を講じている。魯迅を学堂に招聘した許壽裳はこの生理学のテキストを「人生象數」と命名した。

この論文では『人生象數』についてのテキストの各版、構成や内容の説明をして、テキストの編集の仕方、作成の意図、特徴、作成の意義を探りたい。また、その挿絵や文章の材源を探し、それにより、このテキストの形成の舞台が日本の仙台、中国の杭州と紹興とを跨ぐものであり、このテキストが日本を通じて西洋の医学を移入し中国に医学を広め、近代化の一助となったものであることを明らかにしたい。さらに、医学を棄てて仙台医学専門学校を去り、国民精神改造のため東京で文学を志そうとしたいわゆる「棄医従文」は確かなことであるが、それでは医学についての関心はなくなってしまったのであろうか考えてみたい。

### 二 『人生象數』の各種講義テキスト

(1) 講義テキスト

魯迅が杭州の浙江両級師範学堂で作成した生理学のテキストの稿本は長い間行方がわからなかったが、紹興の親戚の家で発見された。その後このテキストの稿本は、周豊一によって魯迅の多くの資料とともに北京図書館に寄贈された。周豊一の寄贈目録<sup>(1)</sup>の中に「人生象數二冊 稿本」と記載されている。「人生象數」は「人生象數」の間違いであろう。

唐弢はこの手稿本を見てこれを基にして『人生象數』を編集し、初めて『魯迅全集補遺続編』の中に収めた。唐弢はその「編校後記」で、「『人生象數』即ち『生理學講義』は魯迅先生が杭州の浙江両級師範学堂での授業のために編集したものである。はじめ紹興魯迅文化館で油印本二冊を見た。おととしの秋に魯迅の遺物一そろいが北京図書館に収蔵され、その中にこのテキストがあり、このテキストは比較的是っきりと写り、表紙に許壽裳が『人生象數』と題字を書いたことを後で知った。これが魯迅先生が持っていたものだと言われた。両本を比較すると、紹興本はインクが滲んでいて、しかも脱落している所があった。これで、私は北京本に依拠することにしたが、やはり紹興本を参考にして訂正する所があった。」<sup>(2)</sup>と述べている。つまり、唐弢は、魯迅が持っていて、後に北京図書館に寄贈された手稿本をそのまま掲載したのではなく、この手稿本に依拠しながらも、不備や不都合な所を「紹興本」を参考にして補い、『人生象數』を編集したということである。ただし、唐弢が参考にしたという「紹興本」の意味は紹興魯迅紀念館所蔵のテキストということであって、紹興で作成発行されたということではない。

馮宝琳はこのテキストの油印本『人生象數』を見て、「このテキストには魯迅先生の細心の校訂と英文の説明の筆跡が見られる。表紙の題字は教務長の許壽裳による。これは『魯迅全集補遺続編』に収められ、文語で編集された生理学のテキストで、呼吸・循環・生殖等の系統はすべて揃っていて、道学伝統がまだまったく壊されていない五十年前においては確かに大胆な科学の最初の試みであった。」<sup>(3)</sup>と述べている。鮑昌・邱文治編『魯迅年譜』は、「『人生象數』講義の手書き原稿二冊は今北京図

書館にある。文章ははじめて『魯迅全集補遺続編』に収められ、『魯迅全集』には収められていない<sup>(4)</sup>。『化学講義録』の稿本、油印本は今はない。<sup>(5)</sup>とする。このようにして発行された唐弢校訂の『魯迅全集補遺続編』の『人生象數』を、この論文では『人生象數』の基本テキストとして扱うことにする。

## (2) 「紹興本」等の各種テキスト

唐弢が参考にした「紹興本」とはどの本か特定はむずかしい。幾冊かの「紹興本」などがあるからである。

浙江兩級師範学堂では生理学講義のためテキストが発行されている。このテキストの上巻を黄川が新疆大学図書館で発見し、1987年論文<sup>(6)</sup>を発表している。そのテキストの表紙の右肩には「山陰周樹人先生編」、中央に「生理學講誼」、左下に「浙師博物科纂訂」とあり、これらを樹木の飾り絵で囲っている。『生理學講誼』と同時に『植物学』（博物科編輯部編）などが十点発見され<sup>(7)</sup>、魯迅の同僚であった錢家治、許壽裳や張邦華の名前も見られる。これらは浙江兩級師範学堂で発行されたもので、この新疆本は杭州版である。この講義テキストは石印本で、筆墨で流暢に書かれている。発見された『植物学』（博物科編輯部編）の「例言」には、編集の目的を学生の研究とし、学生が分担して編集し、鈴木桂寿先生の口述を基礎とし他の先生の学問も参考にし、図画を多く載せ、一切の科学は皆人生を開明していくことを主務とすると書かれている<sup>(8)</sup>。この『生理學講誼』も「博物科纂訂」とあり、「浙師博物科」とは浙江兩級師範学堂博物科のことであるので同じようなことが言えるのではないか。つまり、これは学生たちが魯迅の講義を基にして編集したものであると言えるのではないか。

発見されたのはこの講義テキストの上巻のみであるが、その構成は、「緒論、本論、運動系第一、皮第二、消化系第三、循環系及淋巴管第四、呼吸系第五」となっている。一方、洪水平もまた、浙江省温州で文化大革命中に古紙扱いされた本の山の中から黄川より前に生理学講義テキストを発見して、『魯迅編著的《生理講義》在温州發現』という論文<sup>(9)</sup>を書

いている。黄川は洪水平の論文を読み、その講義テキストが第二巻で、その構成が「呼吸系第五、泌尿系第六、五官系第七、神経系第一」であることを知り、この第二巻は自分の発見した『生理學講誼』上巻に続く下巻であり、これで上巻下巻全部発見されたと考えたが、これは誤りである。

黄川が論文で記述した点について述べると、第一に、温州で発見された本は、右肩に「山陰周樹人編」、中央に『生理講義』とあり、新疆本は「山陰周樹人先生編」、「生理學講誼」、「浙師博物科纂訂」であり、名称が違う。第二に、「呼吸系第五」が新疆で発見された『生理學講誼』上巻と、温州で発見された『生理講義』第二巻の両方にあるのは奇異である。第三に、挿絵に違う点がある。筆者は紹興魯迅紀念館で『生理講義』上下巻を閲覧したが、表紙左下に「吳逸塵題」とありこの点が異なるが、温州本下巻の論文の言及していることと一致するので同一、あるいは同類のものであると思う。筆者の閲覧した『生理講義』下巻は温州本下巻と同じく「呼吸系第五」から始まり、「神経系」は第八であるはずなのに、なぜか「第一」となっている。新疆本の論文には上巻に掲載された挿絵の名称が全部書かれているので、筆者の閲覧した『生理講義』第一巻とを挿絵について照合してみると、「手背」と「足背」の掲載順番が違い、「上支肢一、二」、「下支肢一、二」などの十図が新疆本上巻にはない。反対に新疆本にのみある挿絵もある。つまり、新疆本と、筆者が閲覧した『生理講義』及び温州本とは別物ということになる。第四に、両書とも杭州版であることは同じであるが、『生理講義』のテキストは筆者が確認したように、第一巻と第二巻が確かにあり、横川が言うように『生理學講誼』が上巻で、『生理講義』第二巻がその下巻とはならない。

筆者が紹興魯迅紀念館で閲覧した『生理講義』には、「黄学龍先生<sup>(10)</sup>贈 油印本（石印本）魯迅在浙江兩級師範所編講義」の付表がついて、これは黄学龍という学生が使用したテキストであり、杭州版で紹興魯迅紀念館が保管する「紹興本」となる。温州本と同じく第二巻は「呼吸系第五」で始まり「泌尿系第六」に続き「五官系第七」の最後に「五

官系畢」とあり、そして、「神経系第一」になり、「生殖系」「結論」「生理実験術要略」はなく、「第二巻完」と終わっている。洪水平は「神経系」を「第一」とするのは、「神経系」は深遠で全系統に関わり、また、講義テキストの出版の事情であると考えたが、「第一」は「運動系」であり、「神経系」も「第一」とすると二つになる。このテキストには明らかに複数の人の筆跡が見られ、複数の人が作成に関わり、誤字や書き忘れなどミスが多い。魯迅の筆跡は見当たらないようである。また、テキストにはインクが滲み出て線が太くなった箇所があり、「生殖系」「結論」「生理実験術要略」が欠落していて、唐弢の言う「インクの滲みや脱落」<sup>(11)</sup>はこういうことを言うのであろう。

筆者の閲覧した『生理講義』の本と唐弢編集の『魯迅全集補遺続編』の『人生象數』とを照合してみる。挿絵の面では両方とも形、線はよく似ているが微妙に違う所が多くあり、題目も『人生象數』の「頭骨側視」「手背」「足背」が『生理講義』は「側視頭骨」「手骨」「足骨」になっていて、数字などの字形も違い、骨の空洞の所は斜線であるが『生理講義』は空白のままで、『人生象數』の方が丁寧で精確である。が、『人生象數』は、たとえば「方形頤肌」の名称が他の挿絵の同じ箇所では「寸形頤肌」となっていて「方」を「寸」と見誤り、完全とは言えない。『生理講義』の文章も「緒論」には生理学を表すラテン語の *Physiologia* などの西洋文字はなく、また、脱字、誤字や書き忘れなどがあるが、『人生象數』とは明らかに違う箇所もある<sup>(12)</sup>。この『生理講義』は唐弢が参考にした「紹興本」とは特定できないが、このように手稿本の不備を補い理解を助けることもあるので、唐弢が言うように「紹興本を参考にして訂正する所があった」のであろう。

魯迅が勤めた紹興府中学堂の後身である紹興第一中学初中部には「魯迅紀念室」<sup>(13)</sup>がある。ここに陳列してある『魯迅生理衛生学講義』は、その「劍夫藏」という表記や余白にうっすらと図が見える点、また内容の表記が温州本や紹興魯迅紀念館所蔵テキストとはまた異なる点で、別のテキストであろう。魯迅は紹興府中学堂でも生理衛生学を講義してい

たので、紹興魯迅紀念館には、筆者が閲覧したテキスト以外のテキストがあるかもしれない<sup>(14)</sup>。

### 三『人生象數』の講義テキスト

#### (1) 『人生象數』の題目

『人生象數』の「緒論」の前に「生理學」と記載されていて、生理学が主になるが、解剖学も衛生学もある。そして、「緒論」の冒頭に、「生理学 (Physiologia L.) なるものは、有機体の生命活動を考究する故に、生物学 (Biologia L.) 分科の一科である。全てのものは生命を有し、必ず生命現象が外に現出し、その現出するものを生命活動現象と言い、すべてこの諸現象は生命活動と名づける。故に現象を研究し、その原理を明確にすることがこの学問の為すことである。」<sup>(15)</sup>と生理学について説く。

#### (2) 『人生象數』の目録

『人生象數』の冒頭には、「人生象數一」と「人生象數二」の目録が書かれている。「一」には「緒論」(緒論)、「運動系」(運動系第一)、「轉ヒ<sup>(16)</sup>系」(消化系第三)、「循環系」(循環系及淋巴管第四)、「呼吸系」(呼吸系第五)と、「二」には「泌尿系」(泌尿系第六)、「感官」(五官系第七)、「神経系」(神経系第八)、「孳殖系」(Generatio 第九)、「結論」(結論)、「生象實驗術要略」(生理實驗術要略)と書かれ、下に小さく「許壽裳題字」と書かれている。「Generatio」はラテン語で生殖の意味である。ここには「皮系」(皮第二)が書かれていない。これらの文字は、許壽裳が章太炎の下で魯迅等と学んだ『説文解字』の字体である。他に「骨略図」「肌略図」という文字も見える。この『人生象數』の附録として『生理實驗術要略』がついている。魯迅はこの『生理實驗術要略』を杭州の『教育周報』に独立した論文として 1914 年に修訂して発表している。

#### (3) 構成、内容について

『人生象數』のテキストについて構成の面でみると、はじめに「緒論」で「生理学」の概論を述べ、次に「総論」を「人体の構造」と「人体の

成分」の二つに分け、「本論」として「一運動系」から「九生殖系」まで九の系統に分けて説明し、最後に「結論」として「体温」「代謝」「通言攝衛」の三つに分けて締めくくっている。「本論」の各論は、たとえば「消化系」は「第一分 消化系之構造」「第二分 消化系之生理」「第三分 消化系之攝衛」とほとんどの系統を「構造」、「生理」、「衛生」の三分野に分けて記述し、系によってはその系独自の項目が付け加わる。現代の生理学は器官生理学から細胞生理学、分子生物学へと発展しているが、器官生理学としては基本的にはこの「本論」と現代医学とはほとんど同じである。

学校のテキストとして工夫があつて受講生にわかりやすく、またそれでいて要点は揃っている。挿絵は標題別にはグラフ3も含めると71（個別には99）で、罫線で囲った表は2箇所付いている。挿絵において、たとえば「頭骨」「頭筋の一」「頭筋の二」と同じ頭の形を使い、「胸筋」や「腹筋」などで断面図を挿入する工夫がある。また、「頭骨側視」の挿絵では正面の鼻が見えにくいので、鼻の部分だけ取り出す工夫をしている。文章は、専門的な内容を一般的な内容にまとめ、項目をうまく整理し、四字句を多用し、余分な所は削り、要点を簡潔にまとめていて、しかも筋道がとおっていてわかりやすい。学問の分野として、解剖学、生理学、組織学、衛生学、病理学、寄生虫学と豊富である。そして、専門用語としてラテン語、ドイツ語の表記も付け加わっている。許壽裳も、「魯迅の教え方は順序立てて上手に教え導き、編集した講義テキストは簡明で要を得ていて、学生たちに信服されていた。」<sup>(17)</sup>と評している。魯迅の文章はなんと言ってもまとめ方が簡潔でうまい。たとえば、嗅覚の仕組みについて、「嗅覚神経の末端は嗅覚部に分布し、嗅素はそこに達すると粘液によって吸収される。そして神経の末端を刺激し、脳の中枢に達し、中枢はこれを感じ、ここに嗅覚が起きる。」<sup>(18)</sup>と独自にまとめている。これだけのことであるが、他の参考書は嗅覚の項目はなかったり、中枢神経との関係が記載されていなかったり、説明が冗漫であつたりで、適切ではない。

しかし、内容としては医学専門ではない学生の理解のためということ、また、解剖学、生理学と衛生学の三分野を収め多大な内容になって詳論を避けることになり、学術的には高いレベルとは言えない。そして、間違いやミスが多く見られ、テキストとしての信用性は高くはない。

ところで、魯迅は仙台医学専門学校では授業ノートのとり方について藤野巖九郎先生によって厳しく注意されたが、今回は修正したであろうか。刈田啓史郎氏の『魯迅の《解剖学ノート》に見られる藤野巖九郎の「注意」書き』では九点の「注意」を紹介している。その九点の内『人生象徴』の挿絵に関わるのは、ノートに記入せず注意された無名動脈、無名静脈である<sup>(19)</sup>。『人生象徴』では、「心前視図」や「全身動脈図」で無名動脈<sup>(20)</sup>が、「静脈図」や「林巴総管図」で左右無名静脈<sup>(21)</sup>が記入されているし、文章でも無名動脈や無名静脈の説明<sup>(22)</sup>がある。もっともこれは、『生理衛生教科書』の第二十七図や『解剖生理及衛生』の第百七十図<sup>(23)</sup>、第百八十六図や第百八十九図<sup>(24)</sup>を模写し、『解剖生理及衛生』の大動脈弓や大静脈幹の説明の箇所<sup>(25)</sup>を翻訳しただけかもしれない。挿絵や文が同じなのである。ではあるが、「静脈図」の無名静脈の左右を間違えて記入している。ともかくも修正はされている。

本論に戻るが、このテキストでは、構造、生理を説き、そして衛生につなげ、結論として個人衛生、公共衛生を最後に置いて、衛生に重きを置いている。衛生に重きを置くことは中国の人々が衛生にうとく衛生を重視すべきであるということである。特に青少年の衛生、病気の予防に力を入れている。たとえば、「児童の骨は多くは軟らかく、骨質は曲がりやすく、ゆえに、圧迫が過ぎると奇形になる。」<sup>(26)</sup>と注意を促し、また、近視は学校病の一つで、その防止に詳しい措置を提言している<sup>(27)</sup>。

テキストのこれらの記述には魯迅の学生に対する並々ならぬ教育への姿勢がよく表れている。研究し、構成を体系的に組み、わかりやすく工夫し、多くの手間と時間をかけてテキストを作成する姿に、医学教育への熱い思いが見られる。そして、否定のしようもない事実の世界や科学的で系統的で合理的なものの考え方を提示する姿勢に、旧来の儒教など



の考え方や旧世界とは異なる、新しい考え方、新しい方法や新しい世界に眼を向けさせる啓蒙の意図が見られる。

(4) 参考書籍

『人生象徴』は魯迅が編纂したものであるが、当時日本の医学者もドイツ等の医学書を基にして編纂して医学書を出版したように、魯迅もまた医学書を参考にして編纂した。どのような医学書を参考にしたかは魯迅の蔵書からわかる。魯迅が杭州で生理学を教えたのは1909年で、一年勤めてから1910年紹興に行き、ここでも生理衛生学を教えているので、1910年以前に購入、あるいは発行の医学書と限定できる。第何版かは蔵書の版とする。『魯迅手蹟和蔵書目録』の『第三集外文蔵書目録日本書』<sup>(28)</sup>では

D『通俗動物新論』箕作佳吉著 1903年 東京敬業社 四版

I『石川大生理学(上巻)』石川日出鶴丸著 1909年 東京富山房[ヘルマン、チーゲルステッド]

S K『生理學講本』Steiner,J.著 馬島永徳訳 1904~1909年 丸善書店・南江堂、改正八版至九版 四冊[スタイナー、ヘルマン、ランドア]

K『解剖生理及衛生』宮島満治著 1908年 南江堂書店 四版[パンシュ、ヘンリ、ボック、ランドア、スタイナー、ラーベル等、他に日本人 坪井次郎、森林太郎、小池正直、今田東、三島通良等]

E『衛生学粹』山田薫著 1906年 丸善書店・南江堂[クラーメル]  
(書名の前のアルファベットは便宜上筆者がつけたもの。また[ ]の中は著者が主として参考にした医学者の名前。『外文蔵書目録』の『外国書』でドイツ書の記載があるが、『人生象徴』の材源としては指摘したこれらの日本の参考書で間に合う点、医学書の中国語訳には困難が伴う点などでドイツ書の利用はなかったと思われる。S Kはどこまで八版でどこから九版か不明なので1904,1905年発行の八版をテキストとして使用する。)

上記の書籍は、『魯迅目睹書目』<sup>(29)</sup>でも確認できる。この書目にはEは

「クラーメル著 山田薫訳補」と記載されている。また、

S S『生理学粹』シェンク,ギュルベル著山田薫・谷口吉太郎訳 1902  
年 丸善書店・南江堂 科学集粹4[シェンク、ギュルベル]

が付け加わっている。D、K、Eは北京魯迅博物館に魯迅の蔵書として  
展示されていた。そして、魯迅が1904年、1905年に仙台医学専門学校の  
医学授業で記録した

L『魯迅医学ノート六冊』<sup>(30)</sup>

が加わる。さらに、魯迅が紹興府中学堂で参考にしたという学生の証言  
がある

T『中学生理衛生教科書』呉秀三著 申祺・文祺訳 上海文明書局  
の中国書がある<sup>(31)</sup>。この中国語訳の元になった1903年開成館発行『生  
理衛生教科書』で代用する。

#### (5) 挿絵の出所

挿絵はほとんどが解剖図であるが、中には実験器具のスケッチもあり、  
グラフもある。挿絵の数え方で総数は異なるが、題目がある挿絵は一つ  
として数え、グラフも加えると、「運動系第一」で16、「皮膚系第二」は  
0、「消化系第三」で11、「循環系及リンパ管第四」で8(内グラフ2)、「呼  
吸系第五」で5、「泌尿系第六」で1、「五官系第七」で19(内グラフ1)、  
「神経系第八」で11、「生殖系第九」は0で、計71、内グラフが3ある。  
これらの挿絵の出所は、上記の(4)「参考書籍」のKが35(内推定1)  
で最も多くほぼ半数で、次いでLが16か17(内推定1)、Tが9と3分  
の1、SKが4か3と3分の2、Dが3、Eが1で、不明が2となる。  
似たような挿絵があり、また、挿絵の各部分の名称はその部分の文の説  
明との一致の点により他から取ることもあり、また、名称が間違ってい  
る場合もあるが、両書の挿絵の図形が同じかどうかで判定した。

出所の参考書籍としてK『解剖生理及衛生』が最も多いということは  
Kを基本書に据えていることになる。仙台医学専門学校で記録したL『魯  
迅医学ノート』も多い。魯迅はこのノートを仙台から東京を経て杭州に  
持ち込み参考にしたのである。

留学前に南京で合信の『全体新論』<sup>(32)</sup>を読んで影響を受けたことは間違いないが、同じ挿絵はない。坂井建雄氏の論文『魯迅が仙台で受けた解剖学史の講義について』において、魯迅の『魯迅医学ノート』の挿絵の材源となる書籍を挙げている<sup>(33)</sup>。人体の器官は同じなので模写図もほとんど同じになり似ている挿絵もあるが、それらの参考書の挿絵とよく見較べると『人生象徴』の挿絵とは微妙に違う。また、魯迅の同級生、小野豊三郎の「小野ノート」と先輩の齋藤龍祥の「齋藤ノート」の参考書として挙げた書籍<sup>(34)</sup>、他に挙げられた明治期の解剖学書やドイツ等の書籍の中で魯迅が参考にできた可能性がある書籍<sup>(35)</sup>を調べてみても、『人生象徴』の挿絵とは違う。また、これら以外に、同級生の小野豊三郎の蔵書<sup>(36)</sup>や浦山菊花氏の論文『魯迅的解剖学筆記初探』で指摘する藤野巖九郎の蔵書<sup>(37)</sup>がある。が、これらのいずれも『人生象徴』の挿絵とは違う。

ただし、石川喜直の『人体解剖学』は、同級生の小野豊三郎が所有し、また、魯迅の先生の藤野巖九郎の参考図書であった。藤野教授は注(30)のように、「筋肉学」「血管学」「神経学」「局部解剖学」を魯迅に教授していた。その藤野教授の参考図書が石川喜直の『人体解剖学』であるから『魯迅医学ノート』には『人体解剖学』の文章や挿絵があることが考えられる。しかし、『人生象徴』の挿絵としてはほとんどなく、また、この『人体解剖学』は三の(4)で示した魯迅の蔵書目録となる『魯迅手蹟和蔵書目録』や『魯迅目録書目』にはなく手元にあったと確認できないので、『人生象徴』の挿絵は『魯迅医学ノート』を拠り所であると考えた。

#### (6) 用語の問題

『人生象徴』のテキストは、医学専門の中国語の文章であり、専門用語もたくさん使用している。では、どのような中国語の専門用語を使ったのであろうか。

単語の名称はほとんど日本語の名称の漢字をそのまま使用している。日本書を参考書とすれば多くはそのまま使用できる。たとえば、『人生象

數』の最初の挿絵、「頭骨側視」図<sup>(38)</sup>の「二前頭骨」「三顙顙骨 A 鱗状部 B 乳状部 C 鼓室部 甲顙顙線 乙外聽道孔 丙蝶骨之一分」「四顙骨」「五上顎骨」「六淚骨」「七鼻骨」「八顴骨」「九下顎骨」「十鋤骨」「十一下甲介骨」のそれぞれの名称は、『解剖生理及衛生』（四版）の「頭蓋ノ側面」「頭蓋ノ前面」<sup>(39)</sup>にほとんどそのまま記載されている。ただ、「一後頭骨」を文章の説明のため補い、「A 鱗様部 B 乳様部」の「様」を「状」に訳し、「蝴蝶骨」を「蝶骨」と略し、「顙頂骨」の「頂」の字を抜いただけである。このように、ほとんどは日本書の漢字をそのまま書けばよいのであり、これがドイツ書であればこのようにはいかない。

が、そうはうまくいかない字や語もある。同字異義、あるいは誤解の恐れのある字や語は注意しなければならない。たとえば、日本語の「筋」は誤解の恐れがあり、中国語の「肌」で、あるいは *Musculus* の M で表記している。また、魯迅独特の名称作りもある。魯迅の浙江兩級師範学堂の同僚、夏丏尊は、「彼の講義テキストは簡潔に書かれていて、しかもことさら古字を用いている。たとえば、“也”で女性の陰部を、“了”で男性の陰部を、“𦍋”で精子を表現し、すべてたとえばこのようで、文字学の素養がなくいまだかつて説明を聞いたことがない者からみれば、まるで天書のような。この書は当時の傑作である。」<sup>(40)</sup>と述べている。魯迅の教え子の呉克剛は「魯迅先生は古い文学が根っから好きで、翻訳名はできるだけ中国固有の名称を使う。たとえば“纖維”は“𦍋”（音は灰で、糸状のものの意味）と訳し、“細胞”は“幺”と訳し、小単位を意味する。また陰茎は“全”と訳し、“子供はまだ男女のことを知らずして陰茎が勃起する。”という老子の話を引用して根拠にする。当時科学の名称は統一されていなく、しかもいくぶん品がなく、中国固有の名詞には及ばないので、魯迅は奇をてらったのではない。」<sup>(41)</sup>と述べる。

唐弢は『魯迅全集補遺続編』の『編校後記』で、「因此很保存了一些寫法較僻的字體，這在其他文章裏，也常常可以見到的。如腦作腦。胸作匈，脈作脈，瀉作瀉，輦作輦，唱作歌，端作端，桌作卓，椅作倚，腿作腿。也有並用的，如橫隔或作橫隔，營養或作榮養，玻璃或作波黎。詞兒方面，

簡單也寫單簡，發展也寫展發，分析也寫析分等等。凡可保存，我都給他保存着，但因刻字困難，因而改植通用字體的也不少。」<sup>(42)</sup>と、魯迅の文字の使い方に驚きながら、また、刻字に困ったことを述べている。

他にも、繫（靱帯）、聯接（關節）、雜質（化合物）、人主肌（随意筋）、自主肌（不随意筋）、卵白質（蛋白質）、赤血輪（赤血球）、毫管（毛細管）、欧氏管（エウスタキオ管）等と、意味と音を考えて工夫している。

医学書だけではないが、どのような用語を使うかということは、他の医学書との用語の統一の問題にも関わることである。よく医学用語の比較の例にとられるのは神経の名称であるので、脳神経と脊髄神経の名称を比較してみる。松本秀士氏の『清末刊行の中国文人体解剖学書について』によれば、英国人宣教医師のホブス（合信）の中国書『全体新論』（1851年）では脳神経は10対で、ダッジョン（徳貞）の中国書『全体通考』（1886年）では12対であり、奥山虎章著作の医学用語辞典の日本書『解剖生理学語部』（1881年）では12対である<sup>(43)</sup>と言う。『人生象數』をこの『解剖生理学語部』と照合してみると、脳神経の数は12対で、それらの名称は日本字が中国字になっただけであり、脊髄神経もその総数31対で、頸神経8対、背神経12対、腰神経5対、薦骨神経5対、尾骶骨神経1対と同じである。ただ『人生象數』は頸堆、背堆、腰堆と椎という字が入り、尾骶神経が尾骶骨神経になっている。『人生象數』の神経系統の該当箇所は『解剖生理及衛生』（1908年第4版）に拠っていて、その『解剖生理及衛生』が医学用語辞典の『解剖生理学語部』の名称を引き継いでいるのである。そして、『解剖生理学語部』の用語を現代日本医学と照合すると、外旋神経が外転神経に、聴神経が内耳神経に、副行神経が副神経に、背神経が胸神経に、薦骨神経が仙骨神経に、尾骶神経が尾神経に変わっていて、他は同じである。同じように『解剖生理学語部』の用語を現代中国医学と照合すると、外旋神経が外展神经（展神经）に、顔面神経が面神经（顔面神经）に、聴神経が位听神经に訳され、副行神経が副神经に、背神経が匈神经に、薦骨神経が骶神经に、尾骶神経が尾神经に変わっているだけで、他は同じである。要するに『人

『人生象數』は、一部だけを見て例としたが、中国固有の文字を使った箇所もあり、また、独自に工夫した字もあるが、大部分の文章は日本医学書より移入しているので、用語も『解剖生理学語部』や『解剖生理及衛生』などの日本医学書と同じになり、現代中国医学や現代日本医学とほぼ同じ用語を使用している。

#### （７）材源の編集の仕方

材源の特定は微妙な作業になる。『人生象數』の原文と参考書籍の文との照合の作業になるが、対象が人体という同一物であるので、同じような説明の文があることになる。が、まったく同じという箇所もあり、分類の仕方、順番、名称、微妙な記述の仕方や独特の比喻などが手掛かりになることもあり、簡潔でまとまった文の記述というテキスト作成趣旨と合うかどうかや、その前後でも参考にしているかどうかを手掛かりになることもある。また、三の（４）で述べた魯迅の所蔵書かどうかも根拠になる。ただし、ここで言うところの材源の利用は参考書の文の利用であって、文の利用は当然内容の利用になるが、内容だけの利用ではない。内容となれば特定はむずかしい。また、複数の参考書を利用する混合の場合もあり、その場合主なものを参考書とする。もちろん、材源が不明な箇所もあり、混合で判断に迷う箇所もある。

『人生象數』のテキストにどのような材源がどのように使われているか、始めの「緒論」、「總論」や終わりの「結論」について、参考書別に調べてみる。

「緒論」の冒頭の日本語訳は「三（１）『人生象數』の題目」に記したが、これは『生理學講本』（三（４）のSK）の冒頭の所「緒言」の生理学の説明<sup>(44)</sup>や『魯迅医学ノート』（三（４）のL）の『組織学ノート』

「生理学 総論」の冒頭<sup>(45)</sup>を参考にして作成した文であろうと思う。『人生象數』では次に、「観察」や「試験」を用い、「解剖学」で器官の構造を調べ、「化学」で器官の知識を得て生理を講究するという「生理学」の方法に触れているが、この点も『生理學講本』にも記載されている<sup>(46)</sup>。そして、過去の学者が有機体と無機体の固有の力は別で有機体の力を「生

（活）力」と言ったが、近年は同一の力と認めるようになったことや、力学（物理学）と有機力学（有機物理学）のことなども、『人生象數』と『生理學講本』両書に述べられている<sup>(47)</sup>。『生理學講本』はこの他、「六泌尿系」や「七五官系」で参考にされている。

『人生象數』では、「衛生学」について「於是從其所教。得官品生存時弗失其健康之術。而攝衛學起焉。」と述べ、これは『生理衛生教科書』の「生理學ノ教フルトコロニ從ヒ、有機體ノ生存ヲ健全ニ保持スル方法ヲ講ズル學ヲ衛生學ト云フ」と同じである<sup>(48)</sup>。『人生象數』は次に器官やシステムについて「人體作用之大端。爲運動、消化、循環、呼吸、輸瀉、感覺等。爲之主者。即名曰官（Organ）。諸官相聯。共營一事。則謂之系（System）。如齒舌胃腸。各爲人體一官。而此諸官。皆涉消化。則聰稱之曰消化系。」述べるが、『生理衛生教科書』の「人體ハ實ニ精緻、巧妙ナル一大機關ニシテ、前ニ言ヘル運動、消化、呼吸、排泄、感覺、判斷等ハ其作用ノ主ナルモノナリ。是等ノ作用ヲ司ル身體ノ各部ヲ機官ト云ヒ、各々一定セル官能ヲ具フル諸機官相連絡シテ、共同ノ作用ヲ營ムトキハ、之ヲ系統ト聰稱ス。例ヘバ、齒舌食道胃腸肝脾等ノ諸機官ハ、皆消化作用ニ干與スルモノナルガ故ニ、聰ベテ是等ヲ消化系統ト稱スルガ如シ。」とほぼ同じ<sup>(49)</sup>で、『人生象數』は「運動、消化、循環、呼吸、輸瀉、感覺等」と「循環」を入れて目次の順番に整えている。『人生象數』の本文の最後は「結論」であるが、その「代謝第二」の「生活」、「代謝」、「代謝盛衰」は、『生理衛生教科書』の「第十一章 第二節 新陳代謝」の「生活現象」、「新陳代謝」、「生長・肥満・羸瘦」とまったく同じである<sup>(50)</sup>。また、前者の、次の「通言攝衛第三」の「個人攝衛」の第一段落は、後者の「第十一章 第四節 全身ノ衛生」の「清潔」「運動、休息」と、第二段落は「疾病の原因」と、第三段落と第四段落は「疾病の治療」とまったく同じである<sup>(51)</sup>。最後の所で、体質の弱い人は抵抗力がなく衰え死ぬこと、衛生を重んぜず藥石に頼るのは学理に逆うことや中国の天然痘の例を述べて、中国の実状を取り上げていること<sup>(52)</sup>は注目される。『生理衛生教科書』はこの他、「一運動系」と「二皮膚系」で参考にされ

ている。

次は細胞論であるが、『人生象數』の、「玄爲單簡生體。故具有生活之見象。如運動、攝取、生長、繁殖、分泌皆是。以能分泌故。則泌質外輸。互聯成腠。名其所泌者曰玄間質。或曰原質。惟玄多質少。則與前名。質多玄少。則與後名。」は、『解剖生理及衛生』の「緒論」の「細胞ハ單純ナル一個ノ生活體ナルガ故ニ常ニ生活現象ヲ呈ハスモノトス、即チ運動、攝食、生長、繁殖其他分泌等ノ機能是ナリ〜又ハ分泌物ヲ製出スルニヨリ遂ニ組織ヲ形成スル者ナリ、細胞分泌物ハ細胞間質或ハ原質ト名ク、而シテ間質ト云フ時ハ分泌物ノ少キ場合、原質ト云フ時ハ分泌物ノ多キ場合ナリト知ルベシ」を参考にした<sup>(53)</sup>のであろう。内容としては『魯迅医学ノート』にもあるが、簡潔ではない。『人生象數』の「總論」でも、『解剖生理及衛生』を参考にしている。前者の「人體之構造第一」の「一頭」「二軀」「三支」と、後者の「一頭部」「二軀幹」「三四肢」との説明はほぼ同じ<sup>(54)</sup>で、「人體之成分第二」でも「壹 無機性雜質」は「三鹽類」以外は同じで、「貳 無機性雜質」でもまったく同じである<sup>(55)</sup>。後者の「三鹽類」だけは箇条書きではないので避けたのであろう。『解剖生理及衛生』はこの他、「六泌尿系」と「九生殖系」以外全般的に参考にされている。

『魯迅医学ノート』は主要な参考書で、九の全系統で参考にされている。

それから、魯迅が参考書に拠らず自分でまとめて書いた所も、数は少ないがある。たとえば、三（3）で述べた「嗅覺」の箇所<sup>(56)</sup>は魯迅自身がまとめた所である。

長々と例を示したが、唐弢の『魯迅全集補遺続編』の『人生象數』は二百四十頁余りあり、これらは材源との照合の結果の一部である。

参考書別に言えば、挿絵の出所と同じことになるが、魯迅のテキストの作成趣旨、構成とその順序や内容の面で適合する『解剖生理及衛生』が基本書となる。が、生殖学がない。仙台医学専門学校で記録した『魯迅医学ノート』は相当役に立ったはずである。なんといっても自分で医



学を学習しその時に一言一句記録したノートであり、藤野先生に添削までやってもらっているのであるから。が、何人もの先生の講義録で、文章が長く簡潔でなく、箇条書きなどで整理されていない。また、肝心の衛生学がない。『生理學講本』は専門分野で役に立っている。『生理衛生教科書』は広い分野で簡潔にまとめられていて魯迅のテキスト作成の趣旨に合う。

編集の仕方は、魯迅の編集趣旨を基本に据え、一冊の医学書をそのまま丸々訳すのではなく、その箇所毎に必要な応じて複数の本の中より適宜選び、そのまま利用する所もあれば、選び合わせた所もあり、また、少ないが自分で独自にまとめた所もある。そして、学習者が解剖、生理、衛生全般的に筋道を通してわかりやすく理解できるように、要領よく簡潔に表現している。

ところで、筆者としては、魯迅作品の中の人物の形象や作成過程に関心がある。日本の当時の医学テキストは、参考となる医学書を基にして編集することが一般的で、この『人生象數』のテキストも同様である。そこで、このテキストと参考になる医学書とを照合することによって編集の仕方がわかってくる。その編集の仕方が手に取るようにわかる箇所では、個人的なことであるが、魯迅に半歩近づいた錯覚を覚える。そして、その編集手法は他の創作作品の人物形象にも通じるように思える。決して一冊の本ではなく、複数の本の中より適宜選び出し合成して、新しいものを提示する方法である。創作作品の人物形象は自然主義的作風で、何人もの人物を合成して誰かわからなくして、読者のモデルについての意見や質問にまともに反応せず、ただ読者の反応を楽しみほくそえむばかりの魯迅である。「書く事柄はたいてい見たか聞いたか縁のある事であるが、事実をそのまま使うのではなく、ただその一端を取り、これに改造を加え、あるいは発展させ、自分の考えをほとんど完全に発表できるところまでやる。人物のモデルも同様で、専ら一人だけを用いたことはなく、口は浙江で顔は北京で衣服は山西というように、いつも寄せ集めた人物である。」<sup>(57)</sup>と人物形象について述べているが、このテキス

トの編集の仕方と同じことではなかろうか。

魯迅はこの『魯迅医学ノート』を再び手にし、藤野厳九郎先生が朱で修正し、注意書きをした所を見ることになるのであるが、先生の厳しさの中にある、外国人である自分に対する温情を改めて感じたことであろう。また、先生の、中国への医学伝播の期待が、実際このような形で実現したことに思い至ったことであろう。そして、1926年『藤野先生』を書くことになる。

#### (8)「生理学」の授業

「生理学」の授業の様子は資料で垣間見ることができる。

魯迅は杭州の浙江両級師範学堂では、優級師範で生理学の授業を担当していた。当時学生であった呉克剛は授業が生き生きとしてよかった、時には満場大笑いすることもあったと言う<sup>(58)</sup>。また、同じく学生であった許柏年は、その兄が魯迅先生に質問しに行くといつも嫌がらずに存分に答えてくれ、完全にわかるまで説明してくれるので、学生は魯迅先生を尊敬していたと述べていたと言う<sup>(59)</sup>。同じく学生の蔣蓉生(蔣謙)は、魯迅先生の部屋によく行きよく質問して、授業をいつもよく聞くので試験準備はあまり必要がなかったとも言う<sup>(60)</sup>。反対に、学生の傅惟安は魯迅先生は課外に学生に話しかけることはなく、話す機会はほとんどなかったと言う<sup>(61)</sup>。これは自分で先生を求めていかなかったからであろう。

紹興の紹興府中学堂では監学の要職以外に博物科の授業を担当し、生理衛生学を教えた。学生の呉耕民は、魯迅先生の授業は明晰で、内容は深くてもわかりやすく、生き生きとして聞いてもあきなく、聞いたことは忘れにくかったと言う<sup>(62)</sup>。同じく宋崇厚は、魯迅先生は生理衛生科の授業中テキストを見ず、また学生にもテキストを見させず、精神を集中して受講しないわけにはいかなかったと述べている<sup>(63)</sup>。

つまり、講義テキストは精緻な文章で要領よくまとめられ、学生に教科書を見させず内容をまず理解させる教授法で講評を博し、教室の授業以外でも求めがあれば熱心に丁寧に対応していた。こうして学生は魯迅を慕い尊敬するようになっていった。

夏丏尊によれば、魯迅は学生の要求により生殖の講義をすることとなり、これは当時とても許されないことであったが、魯迅は厳粛な雰囲気が必要とするので決して笑わないことを条件として実行し、成功した<sup>(64)</sup>と言う。

また、化学の実験中に爆発事件があったが、『人生象徴』の附録の『生理実験術要略』にも示されるように、実験を重視していた。実験、実習や実技は、学生自身が自分で実験や作業をすることにより、実物の実態や仕組みなど科学的に認識し、新しい眼を開いていくことにつながる。これは、旧来の誤った教え、考え方や思想を排除し、新しい知識、考え方や思想を開かせていくものである。

#### 四 テキスト作成や生理学授業の意義

張仲民『晚清出版的生理衛生書籍及其読者』より要約して引用する。「明末清初宣教師によって『泰西人身説概』や『人身図説』などの書物によって西洋医学が伝達され、アヘン戦争後、生理衛生や医学に関わる書籍が伝えられ、特に生理衛生に関わる書籍は 1870 年代より宣教師によって出版されていった。魯迅が南京で読んだ『化学衛生論』はその一書であった。日本との戦争後、進化論と戦争敗北、亡国意識が結びついて、衛生が国民の身体を改造し、種族の改造をするとの考え方から、知識人の間で衛生を重視し、強身救国を主張しようという動きが盛んになった。こうして、生理衛生に関わる多くの教科書や書籍が出回るようになっていった。」<sup>(65)</sup>と述べられている。

この論文には出版された 130 程の生理衛生に関わる教科書や書籍のリスト<sup>(66)</sup>が載っている。その中には魯迅の『人生象徴』はない。宮島満治著『解剖生理及衛生』と呉秀三著『生理衛生教科書』の両書の中国語訳書はある。このリストは新聞雑誌の広告欄を基にして作成され、書籍目録や訳書目録で補ったもので、『人生象徴』は学校の授業用であって、一般には販売しなかったので広告を出さず、リストに上がらなかったのではと思う。

リストには、外国人医学者、特に日本人医学者の著作で、中国人訳が多く見受けられる。が、魯迅のテキストは、「三（７）」で述べたように、多くの訳書のように丸々一冊の書籍を訳したのではなく、複数の書籍と医学ノートから必要且つ適切な所を選択し抜粋して構成されている。しかも医学の学習者ではない翻訳者が翻訳したのではなく、日本での医学の学習者が編集、翻訳したものである。そして、魯迅のテキストは、三（３）で述べたように、系統が全部あり、各系統ごとに構造・生理・衛生と三分野が揃い、順序立てて理解でき、挿絵は多くなく文は文語ではあるが、読む者の立場を配慮して文章は要を得て簡潔でわかりやすく記述されている。実際、テキストも授業も、三（８）で示したように学生に理解しやすく好評であった。そして、三（３）（４）（５）（６）で述べたように、医学教育書の内容としても用語の点においても当時としては最新のもので、現代の器官系統の医学とは基本的には同じ内容が多い。が、構成、生理と衛生と三分野に分けたこともありレベルの高い、詳しい専門書とは言えず、また、誤りや不明瞭な箇所が多いのは欠点である。

多忙な中で医学の専門書を参考にして編集をやり遂げた点、また、編集の仕方や要約の仕方の点に、魯迅の医学や医学教育への姿勢、人々への健康維持や病氣予防の思い、科学的方法や思考への導入による啓蒙の意欲などが表れている。

## 五 「棄医」について

「棄医従文」とは、魯迅が仙台医学専門学校での医学をやめ退学し、東京に帰り国民精神の改造のために本格的に文学を志したことを言う。医学をやめ退学した「棄医」、そして、本格的に文学に志し文学に従事した「従文」は確かなことであり、「棄医」となったのであるが、医学についての関心は本当になくなってしまったのであろうか。

『呐喊』自序」では、父親の看病の経験から漢方医は意識的に無意識的に騙りに過ぎないと気づき、騙られた病人とその家族に対して同情を抱くようになり、医者になり病人の苦しみを救ってやろうということや、

日本の維新が大半西洋医学に端を発していて国民に維新への信仰を促進させようということ、この二つの理由で仙台医学専門学校に入学したこと、そして、これらは幼稚な知識で甘い夢であったこと<sup>(67)</sup>が書かれている。また、「棄医従文」の理由として、愚弱な国民が健全で長生きしても見せしめの材料と見物人になるだけであり、病死する人が多くなっても不幸とは言えないのではないか<sup>(68)</sup>ということを挙げている。

第一に、この「棄医従文」の理由は「見せしめの材料と見物人になるだけ」という希望の持てないことによる投げやりで皮肉な言い方であり、「病死する人が多くなっても不幸とは言えない」は魯迅の本意ではなく、「病死する人が多くな」るのは「不幸」であるが本意であるはずで、この理由は医学をやめて病人を救わないという「棄医」につながっていかない。第二に、この「棄医従文」の理由は、医学と文学を比較し文学の方が重要であって、文学を選択するために見出された理由であって、選択されなかった医学そのものを完全に否定しているわけではない。第三に、文学志望は医学志望の二つ目の理由、国民に維新への信仰を促進させるということは代行できるが、一つ目の理由、病人の苦しみを救うということは代行できず、文学では病人を救えないので「棄医」につながっていかない。第四に、医学志望は「幼稚な甘い夢」という反省は「棄医」につながる。が、『朝花夕拾』の『父親的病』には父の死まで世話をし見守る経過が描かれていて、その描写にはやるせない痛切な思いが籠っている。この少年時代に築かれた漢方医に対する不信、恨みや後悔、そして、医者による救済の初心の願いは簡単には消えるものではなく、「幼稚な甘い夢」という反省によって完全に排除されないのではないか。第五に、いわゆる「試験問題漏洩事件」や「幻灯事件」が魯迅に述べられる通りであった場合でも、どんなにひどい嫌な思いをしても、どんなに激しい衝撃を受けたとしても、病気で苦しみ、啓蒙が急務とされる中国人の救済のためには医学は放棄できないのではないか。第六に、上記の「棄医従文」の理由、「試験問題漏洩事件」や「幻燈事件」以外の言えないような他の「棄医従文」の理由があったことは充分考えられる。た

たとえば、医学は逐一暗記する学習で面白くなく窮屈である。思想や文学の学習ができない。活動場所は田舎の仙台ではなく、やはり仲間がいて情報が得られ諸活動ができる東京がよい。敷浪教授は 1905 年にドイツへ留学するが、それまでは藤野教授にしても留学経験さえなく、日本医学は所詮西洋医学からの移入で、受け売りではないかなどが考えられる。しかし、これらのことを解決しても一つ目の医学志望理由は解決できないのではないかと。以上の点から、確かに「棄医従文」ということになったが、「従文」は完全に「従医」に取って代わったのではなく、「棄医」そのものに完全には至らず、医学についての関心は残り続けたのではないだろうか。

杭州での生理学、紹興での生理衛生学の講義の仕事は、魯迅が学校から給料をもらって母親や結婚した周作人夫婦に仕送りをするためだけであろうか。教員の仕事としては仙台で学んだ医学になろうが、医学の授業は、俸給を得る仕事として担当するだけではなく、もっと積極的な意味があったのではないだろうか。

生理学のテキストを作成し、生理衛生学を学生に教え育て、衛生を普及させるということは、上記で触れたように、魯迅の医学の選択の理由、漢方医学ではなく人々を本当の医学で救うという道に沿い、明治維新を導いていった医学による、維新の信仰を国民に促進させるという道にも沿っている。第四章で引用した、進化論と戦争敗北、亡国意識が結びついて、衛生が国民の身体を改造し、種族の改造をする点で衛生を重視するという願望にも一致している。「棄医」ではなく、「従医」は形を変えて行われたのではないかと。また、魯迅の本来の考え方、種族維持、救国、廃満興漢、精神改造、立人思想にも沿ったものでもある。であるからこそ、真面目さや責任感からだけでなく、テキスト作成や授業に一生懸命に取り組んだのであろう。

第四章の引用では、清末民初に生理衛生面の出版が流行し、そのほとんどは日本の医学書の中国訳書であるということだった。日本の明治期の西洋思想、知識、技術、文化等が留学生達によって中国に移入された

が、その一つに医学があり、張仲民の130程の書籍のリストの内容はこの事実を語っている。魯迅の『人生象徴』のテキストもまた、中国の紹興、南京を経て日本の東京、仙台へ行き、そして戻ってきた杭州と紹興の地で、『解剖生理及衛生』を始めとした日本医学書と仙台で日本医学の授業内容を記録した『魯迅医学ノート』とを翻訳編集したものであって、日本の医学学問、それは即ち西洋医学学問を移入したものである。日本に移入された西洋医学は、日本の近代形成の一事となったが、中国に移入された日本医学は同様に中国の近代形成に役立ち、魯迅の『人生象徴』のテキスト作成や授業もまた近代形成の一助となったのである。『藤野先生』で、藤野先生は魯迅を通じて中国に新しい医学が生まれることを希望していたと書かれている<sup>(69)</sup>が、些細ではあるが、その希望は一部実現したのである。

魯迅は、杭州と紹興での医学の講義の後、医療に従事することにはならなかったが、医学についての関心はまったく消えてしまったのではなく、残り続けていたと思われる。

『呐喊』の『狂人日記』(1918年)の数々の「狂人」、『薬』(1919年)の人血饅頭、『明日』(1919年)の何小仙の処方等に、執拗なまでに伝統的な医術や風習に対する反発が見られる。『彷徨』の『弟兄』(1925年)では、誤診をする漢方医と、適正費用で正しい診察をして唯一信頼できる薬屋を紹介するドイツ人医師とが対比的に描かれている。『朝花夕拾』の『父の病気』(1926年)では漢方医に対する強い不信と不満、父を結局死なせてしまった後悔が痛切に描かれ、『藤野先生』(1926年)では中国に新しい医学の生まれることを希望し熱心に指導してくれた藤野先生への思いが克明に描かれている。『三閑集』の『皇漢医学』(1929年)では伝統的な中国医学を賛美する日本人を批判している。『魯迅全集』の「書帳」には、『最新生理学』『Der körper des Menschen』『細胞学概論』『人体解剖学』『生理学(上)』『医学煙草考』『橋田氏生理学』『人体寄生虫通説』『比較解剖学』等が見られる。『魯迅手蹟和蔵書目録』や『魯迅目録書目』ではこれら以外に、『支那中世医学史』『人生遺伝学』が見られる

(70)。魯迅の子息の周海嬰はその著『魯迅与我七十年』で、父の魯迅は自分の病気には無頓着なくせに知人や周建人の子が病気になるとたいへん心配しあらゆる配慮をした<sup>(71)</sup>と述べ、また、硝酸銀とグリセリンの口内炎の薬や顆粒ヨードなどの外用薬、咳止め水薬などの内服薬を家に常備し、息子が喘息を起こすと蒸気吸入法、温湿布法やからし粉を塗る方法で自ら息子に治療を施し、それでも治まらない場合は医院に何度となく連れていった<sup>(72)</sup>と述べている。魯迅の診察の依頼先は池田医院、福民医院、佐藤歯科医院、篠崎医院や須藤医院の日本人医師か、西洋医の中国人医師の陸炳常かで、最期の時も須藤五百三医師であったが、医師の選択も医学へのこだわりを示しているのではないだろうか。

#### 注釈

- (1)『北京圖書館所藏魯迅手稿抄本簡目』77 頁、文物参考資料編輯委員會編『文物参考資料』1953 年第 11 期。
- (2)唐弢編『魯迅全集補遺続編』「編校後記」942,943 頁、上海出版公司 1952 年。唐弢『魯迅的美学思想』（人民文学出版社 1984 年）、『向魯迅學習』（平明出版社 1953 年）にも掲載。
- (3)馮宝琳『介紹魯迅早年的几種手稿和墨迹』20, 21 頁、『文物』1959 年第 3 期総第 103 号。
- (4)2001 年発行『魯迅佚文全集』（劉運峰編、群言出版社）、2006 年発行『魯迅全集補遺』（劉運峰編、天津人民出版社）、2006 年発行『編年体魯迅著作全集』（福建教育出版社）、2009 年発行『魯迅著訳編年全集』（人民出版社）、2011 年発行『魯迅大全集』（長江文芸出版社）には収められている。
- (5)鮑昌・邱文治編『魯迅年譜』72 頁、天津人民出版社 1979 年。
- (6)黄川『魯迅編著的《生理学講誼》在新疆發現』20～22 頁、北京魯迅博物館編『魯迅研究動態』1988 年 2 号（70 号）。
- (7)『名学』（許壽裳述）、『倫理学』（美 梅亜海德著、錢家治解述）、『博通地志学（卷 1）』（許壽裳述）、『動物学（三卷）』、『植物学』（博物科編輯部編）、



『植物分類学』、『植物解剖学』、『鉱物学』、『無機化学』（張邦華述）、『地質学』。

(8) 黄川『魯迅編著的《生理学講誼》在新疆發現』（6）20, 21 頁。

(9) 洪水平『魯迅編著的《生理講義》在温州發現』、紹興魯迅研究会編『紹興魯迅研究 專刊3』1984 年。

(10) 黄学龍は、1877 年生、1962 年亡。又の名を朱華・躍龍、号は慈哉、湖溪（浙江省東陽市）の人。近代の針灸家。清末は学生で、浙江兩級師範学堂優級博物科を卒業している。『新浪博客』の呉立梅のブログ「中国中学時期的部分教職員工（一）」（2011 年 11 月 10 日作成）に「黄学龍」を紹介している。（[http://blog.sina.com.cn/s/blog\\_5df9c6bf0100v38n.html](http://blog.sina.com.cn/s/blog_5df9c6bf0100v38n.html)）

(11) 唐弢編『魯迅全集補遺続編』「編校後記」（2）943 頁。

(12) 『生理講義』と『魯迅全集補遺続編』の挿絵については大体は同じであるが、誤字、脱字、書き忘れなどによる違いがあり、追加・書換えによる違いもある。たとえば、最初の「骨略図」の「頭骨側視」で、前者は鼻部の図に「十、十一」の名称番号がない。「上支肢一」では後者の「十一浅総屈指m」「十二総伸指m」「十五中手諸m」が前者は「十一浅総屈折m」「十二長屈折拇m」「十五中指諸m」になっていて、前者には「肩脚骨之突起」「大圓（？）m断面」が挿入されているが、後者にはない。後者の「緒論」の第四段の二・三行目の文（594 頁）では、「乃知凡有見象。無間官品非官品。其所顯見。皆緣同一之力。初無有二。特一繁一簡。有差別耳。」で、前者が「乃知凡有見象。無間官品其所顯非官品見皆緣同一之力。初無有二。特一繁一簡。有差別耳。」となっていて前者に乱れが見られる。前者の文では、次の次の段落では「得二单左右」の次に「前後」が入っていて、三段落後の「亦或有之」の「或」は後者は「恒」で、前者の誤りである。

(13) 紹興市の倉橋に魯迅が勤めた紹興府中学堂があり、今は「紹興第一中学初中部」になっていて、校内に「魯迅紀念室」があり、展示室となっている。

(14) 林默涵編『魯迅大辞典』（人民文学出版社 2009 年）1210 頁「生理講義」に「紹興府中学堂の蔡欽銘という学生がテキストを紹興魯迅紀念館に寄贈した。」とある。

- (15) 唐弢編『人生象數』593 頁、『魯迅全集補遺続編』上海出版公司 1952 年。
- (16) 『説文解字』に「匕，変也，从到人。」とある。
- (17) 許壽裳『談魯迅在杭州教書』26 頁、『西湖』文芸編集部編『魯迅在杭州』1979 年。
- (18) 『人生象數』(15) 743 頁。
- (19) 刈田啓史郎『魯迅の《解剖学ノート》に見られる藤野巖九郎の「注意」書き』119 頁、『藤野先生と魯迅—惜別百年』東北大学出版会 2007 年。
- (20) 「心前視図」は『人生象數』(15) 689 頁、「全身動脈図」は『人生象數』(15) 691 頁。
- (21) 「静脈図」は『人生象數』(15) 695 頁、「林巴総管図」は『人生象數』(15) 703 頁。
- (22) 無名動脈は『人生象數』(15) 693 頁、無名静脈は『人生象數』(15) 695 頁。
- (23) (20) の「心前視図」は呉秀三著『生理衛生教科書』(開成館 1903 年) の 53 頁。(20) の「全身動脈図」は宮島満治著『解剖生理及衛生』(四版、南江堂書店 1908 年) の 239 頁。
- (24) (21) の「静脈図」は宮島満治著『解剖生理及衛生』の 265 頁、「林巴総管図」は同 273 頁。
- (25) (22) の動脈は宮島満治著『解剖生理及衛生』の 240 頁、静脈は同 267 頁。
- (26) 『人生象數』(15) 617 頁。
- (27) 『人生象數』(15) 783, 784 頁。
- (28) 『第三集外文蔵書目録 日本書』84, 85, 86 頁、北京魯迅博物館編『魯迅手蹟和蔵書目録』1959 年。
- (29) 中島長文編『魯迅目睹書目』22, 23, 24 頁、1986 年。
- (30) 東北大学図書館所蔵『魯迅医学ノート六冊』複製本。楊燕麗『關於魯迅的“医学筆記”』(『魯迅研究月刊』1997 年第 1 期) によれば、紹興から北京へ転居の際魯迅が紛失したと思っていた『魯迅医学ノート六冊』は紹興の同郷人の家に預けてあり、発見された後北京魯迅博物館に寄贈された。そして、

その複製本が東北大学に寄贈された。その内容は以下のとおり。

『魯迅医学ノート』（頁数は、ノートの右頁右下、あるいは左頁右下による。）

〔題 目〕〔頁〕〔授業学年〕〔教師〕〔記録方法〕〔備 考〕

#### 1 解剖学ノート

解剖学緒論総論	1～13	一年	敷浪教授	書写	13 頁は系統解剖学区分
骨格学	14～146	一年	敷浪教授	書写	骨格図 31、題のみ 2、グラフ 1
靱帯学	147～206	一年	敷浪教授	筆記	靱帯図有り
筋肉学	207～305	一年	藤野教授	書写	筋肉図 42、305 頁題名のみ

#### 2 脈管学ノート

脈管学	1～134	一年	藤野教授	筆記	添削有り、脈管図有り
神経学	135～259	一年	藤野教授	筆記	添削有り、神経図有り
局部解剖学	260～334	二年	藤野教授	筆記	添削有り、解剖図有り

#### 3 組織学ノート

組織学	1～151	一年	敷浪教授	1～38 書写、39～151 筆記
生理学	152～349	一年二年	横田教授	書写 一年は三学期

#### 4 五官学ノート

五官学	1～123	一年	敷浪教授	筆記	五官図有り、視覚・聴覚・ 嗅覚・味覚・触覚
内臓学	125～325	一年	敷浪教授	筆記	内臓図有り、消化・呼吸・ 泌尿・生殖

#### 5 病変論ノート

病理学	1～193	二年	東・柏村教授	筆記	図は 3
-----	-------	----	--------	----	------

#### 6 有機化学ノート

有機化学	1～296	一年	佐野教授	筆記
------	-------	----	------	----

(31) 紹興魯迅紀念館編『郷友憶魯迅』（紹興魯迅紀念館 1986 年）の王鐸中『憶魯迅在紹興府中学堂』100 頁に、「先生の生理衛生学の授業に、上海文明書局出版の『中学生理衛生教科書』（日本人著、無錫人訳）を採用していた。」とある。『中学生理衛生教科書』は日本人呉秀三著、無錫人の申祺・文祺の

訳で上海文明書局出版。当時の欽定教科書。

(32) 合信は Hobson, B. という伝道師で『全体新論』を著し、大きな影響を与えた。

(33) 坂井建雄『魯迅が仙台で受けた解剖学史の講義について』（『日本医史学雑誌』第 54 巻第 4 号 2008 年）365 頁の Gegenbaur, C., *Lehrbuch der Anatomie des Menschen*, 7th ed., in 2 vols., Leipzig: Wilhelm Engelmann; 1899、369 頁の Toldt, C., *Anatomischer Atlas für Studierende und Ärzte*, in 6 vols. Berlin: Urban & Schwarzenberg, 1896-1897。

(34) 魯迅の同級生、小野豊三郎の「小野ノート」は東北大学史料館にあり、先輩の齊藤龍祥の「齋藤ノート」は東北大学医学図書館にある。前者の参考になった書籍は、坂井氏によれば上記の Gegenbaur の書籍、後者は Rauber, A., *Lehrbuch der Anatomie des Menschen*, 4th ed., in 2 vols., Leipzig: Eduard Besold 1892-1894。

(35) 明治期の医学書は、奈良坂源一郎『解剖大全』（『局處解剖学図譜』を含む）、田口和美『解剖攬要』、松村矩明『解剖訓蒙』、東京大学医学部編『医科全書』・『医科全書東京大学医学部日講記聞』、今田束『實用解剖学』、石川喜直『人体解剖学』。外国の医学書は、Hyrtl, J., *Lehrbuch Der Anatomie Des Menschen*、Schäfer, E. A., *Quain's elements of anatomy*。

(36) 小野豊三郎の蔵書とは東北大学史料館の「小野豊三郎文書」の中の蘭土亜著山田良叔訳『蘭氏生理学』、石川喜直『人体解剖学』、林春雄『薬理学』を指す。

(37) 浦山菊花著・解沢春訳『魯迅的解剖学筆記初探』（『魯迅研究月刊』2006 年第 9 期）24 頁に、藤野巖九郎の蔵書として Schäfer & Thane, *QUAIN'S Elements of Anatomy*、田口和美『解剖攬要』、奈良坂源一郎『解剖簡明』を挙げる。

(38) 『人生象徴』（15）604 頁の「頭骨側視」、この右下に鼻骨の図がある。

(39) 『解剖生理及衛生』（23）42, 43 頁の「頭蓋ノ側面」・「頭蓋ノ前面」。

(40) 夏丐尊『魯迅翁雜憶』40 頁、西湖文芸編集部編『魯迅在杭州』（『西湖叢書』）1979 年。或いは『憶魯迅』人民文学出版社 1957 年。

- (41) 上記(40)『魯迅在杭州』の、吳克剛『談魯迅先生在浙江兩級師範學堂』43, 44 頁。「全」は性器（陰莖）で、「全作」は性器（陰莖）が勃起するの意味。
- (42) 唐弢編『魯迅全集補遺続編』「編校後記」（2）943 頁。
- (43) 松本秀士『清末刊行の中国文人体解剖学書について』562, 560 頁、『日本医史学雑誌』第53巻第4号日本医史学会2007年。奥山虎章著奥山虎章編『解剖生理学語部』（牧野吉兵衛発行1881年）は「腦脊髓神經分枝畧表」（167～176 頁）でも確認できる。国立国会図書館デジタルライブラリで閲覧可能。
- (44) 『人生象數』（15）は593 頁、『生理學講本』（Steiner, J. 著、馬島永徳訳、丸善書店・南江堂、八版1904, 1905 年）は「上巻」本文1 頁。
- (45) 『魯迅医学ノート』『組織学ノート』（30）は152 頁。
- (46) 『人生象數』（15）は594 頁、『生理學講本』（44）は「上巻」本文2 頁。
- (47) 『人生象數』（15）は594 頁、『生理學講本』（44）は「上巻」2, 3 頁。
- (48) 『人生象數』（15）は594 頁、『生理衛生教科書』（23）は本文1 頁。
- (49) 『人生象數』（15）は594 頁、『生理衛生教科書』（23）は本文2, 3 頁。
- (50) 「代謝」は『人生象數』（15）829～831 頁、『生理衛生教科書』（23）141～147 頁。
- (51) 「個人衛生」は『人生象數』（15）832 頁、『生理衛生教科書』（23）152～160 頁。
- (52) 『人生象數』（15）833 頁。
- (53) 『人生象數』（15）は595 頁、『解剖生理及衛生』（23）は本文2 頁。
- (54) 『人生象數』（15）は597, 598, 599 頁、『解剖生理及衛生』（23）は14～17 頁。
- (55) 『人生象數』（15）は599～602 頁、『解剖生理及衛生』（23）は17～22 頁。
- (56) 『人生象數』（15）743 頁。
- (57) 『我怎么做起小説来』513 頁、『魯迅全集』『第四卷南腔北調集』人民文学出版社1981年版。
- (58) 吳克剛『談魯迅先生在浙江兩級師範學堂』43 頁、西湖文芸編輯部編『魯迅在杭州』（『西湖叢書』）1979 年。
- (59) 許柏年『魯迅先生軼事』67 頁、紹興魯迅紀念館編『鄉友憶魯迅』紹興魯

迅紀念館 1986 年。

(60) 上記 (59) 『郷友憶魯迅』の、蔣蓉生『魯迅和浙江兩級師範學堂』62, 63 頁。

(61) 上記 (59) 『郷友憶魯迅』の、傅惟安『魯迅在浙江兩級師範學堂』64, 65 頁。

(62) 上記 (59) 『郷友憶魯迅』の、吳耕民『回憶七十年前的母校—紹興府中學堂』79, 80 頁。

(63) 上記 (59) 『郷友憶魯迅』の、宋崇厚『魯迅先生在紹興府中學堂』90 頁。

(64) 『魯迅翁雜憶』(40) 39, 40 頁。

(65) 張仲民『晚清出版的生理衛生書籍及其讀者』20, 21 頁、『史林』2008 年 4 月。

(66) 上記 (65) 『晚清出版的生理衛生書籍及其讀者』25～29 頁。

(67) 「『吶喊』自序」416 頁、『魯迅全集第 1 卷』人民文學出版社 1981 年版。

(68) 上記 (67) 「『吶喊』自序」417 頁。

(69) 『藤野先生』307 頁、『魯迅全集第 2 卷』人民文學出版社 1981 年版。

(70) 『魯迅手蹟和藏書目錄』『日文部分』(28)の 86 頁、『魯迅目賭書目』(29)の 23 頁。

(71) 周海嬰『魯迅与我七十年』21～24 頁、南海出版公司 2001 年。

(72) 上記 (71) 『魯迅与我七十年』20 頁。